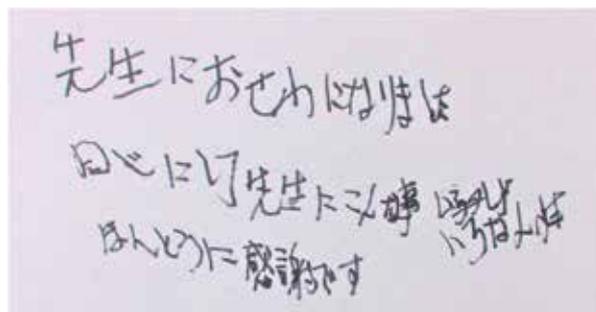


テーマ:神経難病患者さん向け「書くリハビリ」器具

■ 背景

- 脳卒中やALS(筋萎縮性側索硬化症)の患者さんは、麻痺により手指等の動きが鈍くなり、ご自分の名前も書けない状態になることもある。
- この状態を改善したり、少しでも進行を遅らせるために、書字動作のトレーニング(書くリハビリ)が行われている。
- この「書くリハビリ」を始める時にはHBの硬さの鉛筆が推奨されている。ボールペンやシャープペンでは線が細く、滑りやすかったりするし、サインペンなどは筆圧はあまり必要ないが、細かい字がつぶれてしまう。



【現状の実例】

■ 現在の状況、対応方法

- とにかく、鉛筆等の筆記具を使い、書くという練習を継続する。
- 文字がうすく印刷された用紙の上を「なぞり書き」するようなことも行われている。
- また、いきなり文字を書くよりも、塗り絵的なところから始めるような試みもある。

■ 現在の課題

- 各施設で色々な手法が試されているが、特に体系だった取り組みではなく、経験等によるところが大きい。
- 上手く字が書けない要因は幾つかあるが、その1つに、筆圧(上下の動き)のコントロールができないという要因がある。筆圧の可視化ができると、患者本人も指導者にもリハビリの奏功度合い理解でき、効果が高まる。

■ 使用頻度や市場性(マーケットサイズ)

- 日本福祉用具・生活支援用具協会が関連企業にアンケート調査を実施して集計した市場規模は、およそ1兆3,810億円(2015年)であった。

出典:「平成29年度 特許出願技術動向調査報告書(概要)」
(特許庁平成30年2月)

- 近い機能を有するものとして、タブレットがあるが、その市場規模は、世界2020年1億6410万台、日本2021年939万台である。

出典:IDC、MM総研

■ 解決策案の例(概念のみ)



<出典:看護roo!>

機能アイデア例

- 筆圧の程度が、本人に何らかの方法(音や光など)でフィードバックする機能
- 上手く書けたときや前回よりも改善した時に励ます機能
- 文字色を変えることで筆圧を調整しやすくする

■ リハビリテーション部ホームページ

http://www.shiga-med.ac.jp/hospital/doc/department/central_clinic/rehabilitation_dep/index.html